第二章　九州の関ヶ原

石垣原合戦

慶長五年（一六〇〇）二月、細川忠興は丹後国十二万石に加えて、豊後国速見郡・由布院六万石が与えられた。これは「細川家の大名屋敷の台所料が不如意」というためで、家康の意向だといわれるが、秀吉に対する幽斎・忠興のそれまでの貢献を考えれば当然であろう。

家老の松井康之に受け取りに行くよう指示がなされ、有吉立行、魚住市正らを率いて播磨の室津から乗船、三月三日、国東半島の付け根にある木付（杵築）城に着いた。四月には忠興が領内巡視にやってきて、豊前国中津城の黒田如水といざというときの支援について話し合った。そこへ家康の上杉攻めの報がもたらされ、忠興は急いで帰った。

七月、家康に従い、関東に進軍した忠興に、三成に与した丹波・但馬の軍勢が丹後に向かっているとの知らせが大坂から届く。忠興は康之に急いで国元へ戻るよう指示した。康之も丹後国久美の所領が気がかりだったが、船の水夫が集まらなかったため、帰国を断念したという。

黒田・細川連合軍

豊後国は鎌倉時代以来、大友氏が治める国だったが、文禄二年（一五九三）の朝鮮出兵で大友義統が鳳山城を無断撤退したことが原因で改易となり、三十七万石が没収され、毛利輝元に身柄を預けられていた。秀吉の死去で許されたが、この義統が再興を夢み、三成方から軍資金をもらい、かつての大友家の旧臣に呼びかけ、周防から船を仕立てて豊後に向かった。義統は国東半島の熊谷直盛（三成の娘婿）の安岐城に立ち寄り、別府湾に上陸。速見郡立石（別府市）に本陣を張った。そこには大友義統の旧臣で筑後国柳川十二万石の大名になっていた立花宗茂の元に身を寄せていた吉弘統幸も加わっていた。豊後国竹田の中川秀成の寄騎になっていた田原親賢（紹忍・義統の伯父）も中川家の旗印を持ち出し、参陣してきた。

九月十日、吉弘統幸の率いる百余人が木付城に夜襲をかけた。細川側は百姓、町民らを城に入れ、城下を焼き、籠城に備えていた。大友勢は二の丸まで侵入するが、黒田隊が迫っているとの報に船に乗って引き揚げた。如水の本隊が到着する前、先鋒の黒田隊と細川隊は十三日早朝、木付城を出発。黒田軍は角殿山、細川隊は実相寺山に陣を取り、石垣原をはさんで三キロ先の大友軍とにらみ合う。正午ごろには戦の火ぶたが切られる。大友勢の鉄砲隊が攻撃を仕かけると、黒田隊先手が突撃し、康之率いる細川隊も石垣原へと駆け下りた。大きな戦闘が三度あり、午後六時ごろまで続いた。黒田隊は先手を務めた一番備のうち久野次左衛門・曽我部五右衛門を失ったが、大友勢は左・右陣の主将を務めた吉弘統幸や宗像鎮続を失い、敗色は濃厚となった。如水が実相寺山に到着、義統に降伏を勧め、十五日、義統は投降した。その十五日は関ヶ原合戦の日であった。

加藤清正も宇土攻めを後回しにして駆けつけて来ていたが、十七日、国境の豊後国引地村（大分県九重町）まで来たところで勝利を知り、引き返している。

黒田隊に宮本武蔵

ところで、黒田隊の中に宮本無二斎・武蔵父子がいたという説がある。

如水は国東半島の城を落しながら進軍してきた。富来城に攻め込んだとき、三の丸の矢狭間から敵の槍が武蔵の股をかすめた。武蔵は背後の味方の兵に向かって、「この狭間からわれを突く槍を取って見すべし」と言って、突いてきた槍を股の間にはさみ、奪い取った。股のところがえぐられ、血が流れていたが、傷口に馬糞を押し込み、血止めをすると、城に乗りこんでよく働いた、と『丹治峯均筆記』にある。

丹治峯均は福岡藩家老の立花氏の一門で、兵法家。武蔵の直弟子の寺尾孫之丞の弟子らの夜話を元に「丹治峯均筆記」を享保十二年（一七二七）に著している。『二天記』よりも五十年ほど前に書かれている。

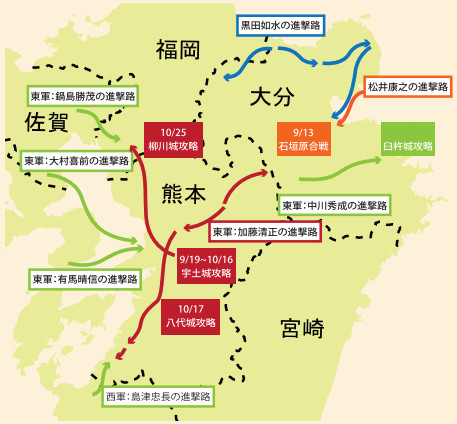
清正、西軍を攻める

大友義統が降伏したとの報に加藤清正はただちに軍を返して小西行長の居城宇土攻めに向かう。城下を焼き払い、養子の加藤百助に命じて水軍も向けたが、城内からの大筒で撃沈された。関ヶ原で西軍が敗れ、行長が処刑されたという報がようやく城内に伝わり、開城した。清正が宇土城に攻め入ったとき、薩摩の出水衆は小西勢救援のため、加藤領のうち葦北郡の佐敷城を包囲、攻撃をする。これには相良勢も加わった。相良長毎は西軍に加わり、美濃国の大垣城に詰めていたが、関ヶ原の敗戦を知るといちはやく寝返った。その情報は黒田長政からただちに父の如水にもたらされ、清正にも伝えられるが、佐敷城では激しい攻防が続いていて、清正は憤慨し、不信感をあらわにしている。「九月二十四日から佐敷で毎日戦っており、そのことを今後の証明のために貴老まで申し入れ候」と如水への返事に書き、さらに「相良のような義理も作法もない者は成敗するように進言してほしい」といっている。その手紙が書かれたのは十月十一日だ。

加藤清正像（熊本市立熊本博物館蔵）

柳川攻めから薩摩

立花宗茂は西軍につき、近江国大津城を攻めた。大津城が開城したのは関ヶ原合戦の当日だった。宗茂が大坂から船で発ち、柳川に着いたのは十月九日。如水が柳川攻めのため兵五千を率いて、今の筑後市水田に十月十五日に着陣している。佐賀の鍋島勝茂は西軍に属していたが、本願寺を通じて家康に許しを請い、三万五千人もの大軍を編成して柳川攻めに加わり、大善寺に陣を敷いた。清正はわずか兵千人を率いただけで柳川近郊の蒲船津に到着した。宇土や八代（麦島）城の開城に手間取ったためだ。



立花宗茂が城を明け渡したのは十月二十五日。宗茂を先鋒に大隈国の島津義弘攻めに乗り出すが、清正の軍が薩摩との国境に差しかかったところで如水から「しばらく攻撃は控えられたい」と言ってきた。水俣まで戻って待機していると、家康から書状が届いた。「島津攻撃は中止しておのおの帰陣するように」。島津との講和が成ったのである。